

女子高等教育機関における野外教育の意義 ——社会人基礎力に着目して——

山下 玲香

1 はじめに

日本の学校教育現場における野外活動は、一般的に小学校や中学校での宿泊学習や林間学校などを想像するだろう。これらの多くは、通常1泊または2泊の宿泊を伴い、学年単位やクラス単位で、いわゆる「青年の家」や「少年自然の家」等の施設・設備が比較的整った青少年教育施設等を利用している。愛知県では豊田市総合野外センターのように、複数の団体が同時に宿泊・活動できる広大な施設もある。注目したいのは、学校で経験したことのある野外活動は、ある程度人数の多い集団で実施する「組織キャンプ」である、という点である。

野外教育とは、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」(文部科学省、1996)⁽¹⁾である。青少年期における野外教育の目標は「全人的成長を支援するための教育」であり、野外教育の期待として、「自然や生命への畏敬の念を育て、自然と調和して生きていくことの大切さを理解させる機会」であり、また、組織的な活動の中で「きまりや規律を守ること、協力することの大切さや、自ら実践し創造する態度を学ぶ」など「総合的学習の機会を提供するもの」とされている(文部科学省、1996)⁽¹⁾。つまり、青年期における野外教育によって、自然に対する知識と理解を深めることができるだけでなく、規律性や協調性、積極性、創造力なども身に付くということである。

それでは青年期における野外教育の効果はどうだろうか。青年期のキャンプの効果として高山(2009)⁽²⁾は、「野外教育、自然教育による社会的スキルやライフスキル、自己成長といった効果が実習を通して得られた」と述べている。また、青木ら(2012)⁽³⁾は、「キャンプ体験は、前に踏み出す力(アクション)の主体性と実行力、考え抜く力(シンキング)の計画性と創造力、チームで働く力(チームワーク)の発信力と傾聴力、状況把握力など社会人基礎力を構成する一部の能力に教育効果がある」と述べている。これらの先行研究から、青年期においても、野外教育によって社会的スキルや社会人基礎力といった、将来的に社会の一員として働く人材として必要なスキルを向上させる効果があると言える。

ところで、筆者の所属する女子短期大学の現代教養学科では、まさに「社会人基礎力」に重点を置いており、所属学生が将来社会で働くことを見据え、「社会人基礎力」を意識したカリキュラム編成を行っている。先述の先行研究(高山ら、2009;青木ら、2012)⁽²⁾⁽³⁾のように野外活動によって女子大生の社会的スキルや社会人基礎力に好影響を与えるのならば、本学科の女子大生に対しても効果があるのではないかと大いに期待ができる。

高等教育機関での野外活動では、ハイキングや登山、飯盒炊飯といった夏季のキャンプや、遊

泳や遠泳、カヌー、カヤックなどの夏季の水辺活動、スキー、スケート、雪洞づくりなどの冬季の雪上活動などが実施されている。これらの野外活動は主に、体育・スポーツ系の学科や教員養成・幼児教育系の学科で実施されている。また、近年、新入生の大学適応への支援を目的として多くの大学で初年次教育が導入され、そのプログラムに野外活動が組み込まれていることもあり、大学生が野外活動を体験する機会があることは大変喜ばしいことである。

このように、高等教育機関の野外活動は、大学生の所属や学年に見合う組織キャンプという形態をもって実施し、一定の成果が見られている。しかしながら、筆者の所属する女子短大生や教員養成系学科などに所属する女子大学生を対象とした野外活動の研究はほとんど見受けられないが、先に述べたように、野外教育が社会人基礎力を身に付けさせる効果があるならば、広く一般的な女子に焦点を当てた野外教育研究は大いに意義があるだろう。また、野外教育によって女子大学生の社会人基礎力が向上するのであれば、どのような野外教育を実施すれば効果的か、大いに関心がある。

そこで本研究では、高等教育機関の学生を対象とした野外活動がもたらす教育的効果を先行研究などから整理し、女子大学生に対する野外教育の意義を提言することとした。

2 方法

高等教育機関における野外活動がもたらす教育的効果について、特に社会人基礎力に着目して、1) 初年次教育対象者、2) 大学体育・共通科目受講者、3) 教員養成課程体育専門科目受講者、の授業の履修対象別に文献調査を行う。

3 結果と考察

3.1 初年次教育学生を対象とした先行研究

大学に入学すると、これまでの学校生活とは全く異なる形式や友人関係に戸惑うことが多い。特に大学入学直後は、勉強面や新しい生活によるストレスも加わり、肉体的・精神的にストレスフルな状態であろう。また、富山 (2018)⁽⁴⁾が指摘する通り、最近ではSNSを通じてのコミュニケーションが発達する一方で、直接の会話や新しい友人作りに困難を感じる学生も増加していることも事実だ。そのような新入生に対して、スムーズな大学への導きとなるのが初年次教育だ。初年次教育とは「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」(濱名、2007)⁽⁵⁾のことである。

金城ら (1991)⁽⁶⁾は、新入生を対象としたオリエンテーション行事の一環として1泊2日の「オリエンテーション・キャンプ」を実施している。参加者の構成は総合科学系学科、経済系学科、工学系学科の男女267名で、「新入生、上級生、教職員が瀬戸内海の大自然の中で寝食を共にし、共に語り、共に楽しみや苦しみを分かち合うことにより、新入生相互また上級生との親睦、教職員との信頼関係が生じ、そこに貴重な人間関係が育成される。また、同じ大学に学ぶ者

としての強い連帯感が醸成されていき、無意識のうちに大学生生活に馴染んでいく」ことをねらいとしており、テントの設営や飯盒炊飯、キャンプファイヤー、レクリエーションなどが実施された。このキャンプ期間の前後に大学への適応に関する質問紙調査を行ったところ、キャンプ不参加者は参加者に比べ6月下旬段階で友人が少なく、高い孤独感を示していたことも報告しており、新入生の友人獲得と連帯感の形成についてキャンプの効果が見られたとしている。

林ら(2018)⁽⁷⁾は、体育系大学の新生320名を対象に、入学式後の授業開始前に3泊4日のキャンププログラムを実施している。このキャンプでは、「4年間の学びを深め、専門家として必要な資質・能力向上の基盤となる『集団への適応能力(人間関係構築)』を高め、『環境への配慮ができる能力』を養うこと」を目的としている。1つの団体は20名程度で、対象の大学近くの湖岸のキャンプ場にてテントを利用し、アイスブレイク、テント設営、野外炊事、仲間作り野外ゲーム、クラス対抗レクリエーション、登山、キャンプファイヤーなどの活動を実施した。この研究では、キャンプ直後に参加した学生が感じた学びはスキルや理解などの具体的なものであったが、時間の経過とともに、コミュニケーションや人間関係といった各自の生活の中で活かせる資源や個人の成長へと質的に変化することが明らかになっている。このことは、単に入学直後の友人獲得やキャンプの技術の獲得といった量的な学修効果だけでなく、自分と周囲の人々の関係性を理解する「状況把握力」や、相手の意見を丁寧に聞き自分の意見を分かりやすく伝える「傾聴力」、「発信力」のコミュニケーションの質的な学修効果があると言えよう。この研究におけるキャンプは、実施大学の立地条件、体育系単科大学という学生の特性、学生と教員のつながりの強い少数数制教育を重視した指導形態といった大学の特性を大きく反映し、他の初年次教育との組み合わせにより有効性が発揮されている(林ら、2018)⁽⁷⁾ため、キャンプ体験そのものによる影響が果たしてどの程度なのかは定かではないが、野外教育によって入学後の大学生生活の適応に対して有効であることは明白である。

筆者の所属する学科では入学後のオリエンテーションの一環として「春のセミナー」を実施している。このセミナーは、隣県の宿泊施設や観光施設などへ赴き、「友達作り」と「時間割作り」を目的に、1泊2日の日程で、上級生による学科の説明やアイスブレイクなどが行われる。2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、学内にて半日の開催となったが、簡単な学科説明やアイスブレイクや個別の時間割作成相談などを行った。大学という新しい環境に適応できるか、あるいは新たな友達ができるか不安を抱える入学直後に行うこの春のセミナーは学科としても重きを置いている。アイスブレイクは、仲間と協力して達成する内容になっているものもあり、野外活動とまではいかないが、仲間との一体感を味わうことが出来る。また、寝食や自由行動を共にすることは集団への適応能力を磨き、人間関係の構築に繋がるだろう。現在はホテルや旅館といった、ある程度設備の整っている環境での研修であるが、社会人基礎力のチームワークを高めることを重視するならば、野外での共同生活などの活動も視野に入れていきたい。

3.2 大学体育・共通科目受講者を対象とした先行研究

川畑ら(2019)⁽⁸⁾は、教養・共通教育科目「自然体験活動入門」の受講者1年生75名(男性42名、女性33名)を対象に、社会的スキルの獲得を検討し、テキストマイニングによる分析を行

うことで、実習におけるどのような要素が学生の社会的スキルの獲得に寄与しているのかを検討している。その結果、他者協力の場面が多い自然体験活動において社会的スキル向上の有効性が示され、自由記述による主観的なレポート分析からも、受講生の学びは教養教育として求められている力の醸成に有効であることが明らかとなっていた。この科目は、人間と自然の関わりについて考える機会となる、自分と他人との関わりについて考える機会となる、自分自身について考える機会となる、生活技術や野外活動技術を学ぶ機会となる、の4点を目標にしており、大学が提携している自然学校をキャンプ地としている。宿泊は全てテント泊であり、食事は2泊3日の期間中、7食中5食自炊を行っている。このキャンプの面白い点は、班編成を工夫しているところだ。できるだけ学部学科が異なるように10～9人の男女混合で編成をしている。また、班長、副班長、食事係、薪係、装備係の役割を設けておりアイスブレイク、冒険的要素を含む課題を解決していく協力ゲーム、テント設営、野外炊事、ナイトプログラム、ネイチャーゲーム、沢登り、キャンプファイヤー、竹細工、活動の振り返りのスライドショーの上映などが実施された。

坂谷ら (2019)⁽⁹⁾は、体育の集中授業として開講されているキャンプ実習参加者23名(男子14名、女子9名、3年生、理系・文系混在)を対象に、授業後に提出されたレポートをもとにテキストマイニング法を用いて学生の主観的な学びについて調査をした。その結果、「人」「班」「班員」「メンバー」に対する記述が多く、他者理解および人間関係に関する学びであったことや、関係の浅いメンバーと多くの時間や経験を共にすることで相互理解、人間関係の深化、自己理解に繋がったこと、野外料理やストレスを伴う達成困難なプログラムは参加者の印象に強く残るなどが明らかとなり、キャンプ実習には有効な教育的効果があると示唆している。このキャンププログラムは、学内のキャンプ可能な野外活動施設及び大学周辺を利用し、主にサイクリング、自然体験活動、創作活動などを3泊4日の日程で行っている。ほぼ初対面の状態で実習がスタートし、キャンプ生活や各種プログラムを通して新たな関係性を築いていく中で、人間関係に関する学び、また自己に関する気づきを得る学生が多いという。

これらの研究(川畑ら、2019;坂谷ら、2019)⁽⁸⁾⁽⁹⁾で注目したい点は、ほぼ初対面のメンバーで班を編成していることと、メンバー全員で活動しなければ達成できない、ある程度のストレスを伴う課題(プログラム)を設定していることだ。ほとんどの活動は班のメンバーで協力しなければ達成することができないようになっている。また、班の中で明確な役割分担がなされていることで、個々の責任が大きくなり、結果として班のメンバーのために役割を果たす(行動すること)になる。これは集団の連帯感を高める要因ではないだろうか。野外活動に限らず、仲間と協同して作業しなければならないグループワークは通常の大学の講義でも行われる。しかし、野外という特殊な環境では、スマートフォンや携帯電話、パソコンといった検索・伝達のツールを制限し、あえて不自由な環境を創り出すことが可能だ。したがって、仲間や個人の知恵、あるいは事前の調べをもとに、課題や困難を解決しなければならない。不自由な環境やその時の自然の状況を楽しむこともまた、野外教育の魅力であり、チームワークを磨く効果的な手段でもある。

吉松(2015)⁽¹⁰⁾の大学生を対象とした共通教育科目「アウトドア」の授業の中での質問紙調査やレポートの分析結果からは、大学生の社会人基礎力に肯定的な影響を及ぼし、特に「行動に移す力」、「協働する力」が身に付くことや、福満ら(2018)⁽¹¹⁾の大学生を対象とした「自然体験活

動入門講座」のキャンプ実習における、5つの因子（自主・自立、自信、自己表現、対人関係、自然観）についての男女の比較では、男子よりも女子の方が5因子全てにおいてキャンプ実習の影響が大きいことなども明らかになっている。野外教育は社会人基礎力に肯定的に影響を及ぼし、かつ女子に対して特に有効であると言えよう。また、福満ら（2018）⁽¹¹⁾の研究では、キャンプ経験が少ない参加学生の行動力の因子の向上が多く見られたという興味深い結果も報告されている。野外活動になじみの少ない所属学科や女子学生に対して、キャンプの体験活動は大きな可能性を秘めている。

3.3 教員養成課程・保育者養成課程の学生を対象にした先行研究

スポーツ系学科や教員養成課程、保育者養成課程などに所属する学科は、将来学校現場で教員として児童・生徒の野外活動に携わるための知識や技術を身に付けるために、体育の専門科目として「キャンプ実習」や「野外実習」などの名称で授業が設けられている大学がある。大学生を対象とした野外活動研究の多くは、これらに所属する学生を対象としており、キャンプの形態もほとんどが組織キャンプである。

西島（2009）⁽¹²⁾は、教員養成課程の学科所属で「キャンプ自習」に参加した女子大学1年生82名（2007年度26名、2008年度56名）を対象に、キャンプ実習前後の意識調査を行っている。この研究でのキャンプは、2泊3日あるいは3泊4日で、「自然の中での活動の重要性を理解し、子どもたちの遠足や集団宿泊行事に対応できる指導力を身に付けていく」ことを目的としている。意識調査の結果では、キャンプ体験後の気持ちの変化に「友達との仲間意識が強くなった」、「自然のすばらしさに気づいた」、「自分自身の内面に対する気づきがあった」などの回答が見られたと報告がなされている。

残念ながら、このキャンプ実習のプログラムについては述べられていないため、こういった体験活動が意識の変化に影響したかは把握しがたいが、友達との仲間意識が強くなったことに注目すると、社会人基礎力の「状況把握力」や「規律性」といったチームで働く力が磨かれたと言えよう。また、自分自身の内面の気付きは、自分自身が知らなかった新たな一面や自覚していなかった自分の性格の発見であると言えよう。つまり、キャンプという非日常体験によって自己分析ができるということだ。

筆者の所属する学科は1年次の必修科目において卒業後に社会人として必要な知識と素質を身に付けるための必修科目があり、自己分析に関する単元もある。また、1年次の前期と後期にPORGテストを実施しており、客観的に自己分析を行う機会を設けている。野外活動の中で新たに発見する自分自身の内面は、通常状況ではない特殊な環境下での発見であるため、これらの自己分析では見えてこない新たな一面になり得る。

社会人基礎力に着目した報告もある。青木ら（2012）⁽³⁾は、保健体育科教諭養成の学科所属で「野外教育実習」に参加した114名の履修生を対象に、8月下旬に3泊4日のキャンプを実施している。主なプログラムはテント泊、野外炊事、ASE（Action Socialization Experience）、登山などで、グループ内での自己の役割の発見力や、責任感、主体性、社会性、コミュニケーション能力などの育成と、仲間とともに一つのことをやり遂げる喜びや達成感を味わわせることをねらい

としている。キャンプ活動の事前と事後、および1か月後に質問紙調査をしたところ（有効回答105名のうち女子32名）、社会人基礎力の「主体性」、「実行力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「傾聴力」、「状況把握力」に教育的効果があり、さらに日常生活でも生かせる能力は向上効果が高いことが示されている。実施されたプログラムは小・中学生を対象とするような比較的易しいものであるため、女子学生にとっても体力や精神に大きな負担をかけるものではないため、どのような体力の女子であってもこのプログラム自体を実施することが可能だろう。特に、自分の意見を分かりやすく伝える力である発信力や相手の意見を丁寧に聴く力である傾聴力、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力である状況把握力などの「チームで働く力」（チームワーク）は、多様な人々とともに目標に向けて協力し仕事を最後まで完成するための重要な能力要素である。テントを張ったり食事を作ったりと、多くの野外活動は必然的に仲間と対話をして協力しながら活動をする。まさにこれらの能力要素が身に付く行動を自然と参加者が行うようになっているのだ。この研究報告と西島（2009）⁽¹²⁾の報告からもわかるように、キャンプ体験によって一部ではあるが社会人基礎力が向上するのは明らかだ。

3.4 野外教育の課題

平成14年7月、中央教育審議会答申（2002）⁽¹³⁾で、「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」が取りまとめられ、青少年の時期には、学校内外における奉仕活動・体験活動を推進する等、多様な体験活動の機会を充実し、豊かな人間性や社会性を培っていくことが必要であるとして、学校、家庭、地域が連携・協力して、社会的な仕組み作り等を行うべきであるとの提言がなされた。これにより、野外教育の教育的価値は非常に高まったように感じる。しかしながら、野外教育は非常に専門的な知識を要することが多く、活動そのものに加え、実施に至るまでに課題が散見しているのが現状だ。

文部科学省（1996）⁽¹⁾によると、野外教育の課題として、①実施期間の短さ、②一貫したプログラム作りの欠如、③プログラムの開発の不足、④効果分析・評価研究の不足、を挙げている。特に③については、キャンプ活動＝テント泊、寝袋、野外、虫、といった固定観念が根強く、ネガティブな印象を抱きやすいように思われる。また、④効果分析・評価研究の不足という観点では、参加者の感想文に頼るところが大きく、科学的な教育効果の分析が不十分な研究が多いというのも事実だ。また、先に述べた統計の手法を用いた先行研究（青木ら、2012；西島、2009）⁽³⁾⁽¹²⁾において、社会人基礎力の「チームで働く力」の一部の要素については効果が見られるものの、「考え抜く力」の課題発見力や「前に踏み出す力」の働きかけ力などのいくつかの要素に関しては効果が見られていない。また、共同生活をしているにもかかわらず、ストレスコントロール力に変化が見られないことにも疑問が残る。社会人基礎力のストレスコントロール力は、ストレスを耐えるのではなく、発生源に対応する力としている。つまり、ストレスを柔軟にかわしたり、ストレスを前向きにとらえたりすることができるということだ。労働政策研究研修機構調査解析部（2007）⁽¹⁴⁾によると、35歳未満の若年者（企業の在職者とハローワークに来所した求職者）の離職理由について、最も多かった回答が「仕事上のストレスが大きい」で43.0%であったとしている。また、入社3年以内に離職した第二新卒者に限っても最も多いのは「仕事上

のストレスが大きい」(26.3%)であり、いかに若者にとって仕事により発生するストレスが大きく、また影響を受けやすいかを物語っている。ぜひとも、就学中にストレスコントロール力を身に付けたいものだ。あえて野外活動に向けての準備期間や本番中、あるいは活動後の振り返りなどでストレスがかかるような活動を増やしたり、ストレスコントロールに関する講義を組み込んだりすることで、ストレスそのものに意識を向けるような工夫と教育が必要であろう。

その他にも、野外教育の課題として、野外教育指導者の課題(専門的な能力を持った指導者の不足、体系的な指導者養成・研修事業の不足、専門家の活躍の場の不足、教員の資質、青少年教育施設職員の資質)や、野外教育の場の課題(自然環境の保全・活用、野外教育の場の整備・活用、青少年教育施設の充実)、安全対策の課題(情報収集の不足、指導者の安全確保、安全教育への理解の不足)などが挙げられており(文部科学省、1996)、野外教育に携わる一教員として、今後の野外教育の発展に尽力したい課題が散見している。

4 まとめ

高等教育機関において、野外教育がもたらす社会人基礎力各種への効果が先行研究から伺えた。また、女子大学生を対象とした先行研究などからも、有効な教育的効果が期待できることがわかった。特に、「チームで働く力」の向上は目を見張るものがあり、野外教育を組み込む時期やメンバーの構成、プログラム内容などを適切に設定することで、よりよい教育活動が展開できるだろう。しかしながら、先行研究からはストレスコントロール力に効果があるとまでは言い切れない。ストレスコントロールについては、就職後、社会人として会社に定着できるかどうかにも関わる重要な要素であるため、社会人基礎力の中でも非常に重要である。この力を身に付けることができるような、事前教育やプログラム内容を開発するなど、今後の課題としたい。

5 おわりに

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年の春から現在に至るまで(執筆開始時2020年9月)日本全体で活動自粛の風潮にあり、他者と接触をしないソロキャンプがブームになっている。また、芸人やタレントのキャンプ動画のインターネット配信や、ソロキャンプに関するアニメや漫画が放送、出版されるなども相まって、個人での野外活動に足を踏み入れる入口は広がり、10代、20代の若い世代の女性が野外活動を楽しみやすい風潮にあるように感じる。そのような風潮の中で、今一度「組織キャンプ」の在り方を考えてみたい。誰かとともに時を過ごす方法は、例えばゲーム、おしゃべり、ショッピング、共通の趣味など、様々あるだろう。その数あるツールの中からあえて自然の中に身を投じて、不自由さや仲間との協働を楽しむ「組織キャンプ」を選択することが、はたして現代の女子学生たちにできるだろうか。彼女たちの学生時代に携わる一教育者として、その選択肢を一つでも増やし、かつかけがえのない印象深い思い出として記憶に残ればと願うばかりだ。野外教育が持つ可能性を広げ、女子大生の将来に寄与する研究を模索していきたい。

参考文献

- (1) 文部科学省 (1996) 青少年の野外教育の充実について、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告
- (2) 高山昌子 (2009) 大学の組織キャンプの効果に関する一考察、太成学院大学紀要11、pp. 85-95
- (3) 青木康太朗 (2012) キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要3、pp. 27-39
- (4) 富山尚子 (2018) 大学入学後の女子大学生の友人関係について、日本心理学会大会発表論文集82(0)、1PM-028-1PM-028
- (5) 濱名篤 (2007) 日本における初年次教育の位置づけと効果、カレッジマネジメント145、pp. 5-9
- (6) 金城亮、黒川正流 (1991) オリエンテーション・キャンプが新生の大学適応に及ぼす効果、広島大学総合科学部紀要Ⅲ(15)、pp. 11-35
- (7) 林綾子、宮本友弘、水津真委 (2018) 初年次教育としてのキャンプ体験が大学適応感に及ぼす影響についての探索的研究—Social Provisionに着目して—、野外教育研究21(2)、pp. 1-13
- (8) 川畑和也、福満博隆 (2019) 共通教育科目としての「自然体験活動」の効果に関する一考察—自由記述レポートによる質的検討—、鹿児島大学総合教育機構紀要2、pp. 67-77
- (9) 坂谷充、坂本昭裕、向後佑香、大友あかね (2019) 大学体育におけるキャンプ実習の効果—テキストマイニングを用いた学生の主観的な学び—大学体育研究41、pp. 83-90
- (10) 吉松梓 (2015) 「アウトドア」の授業が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響—授業アンケートとレポートの分析を中心として—、駿河台大学論叢50、pp. 143-157
- (11) 福満博隆、川畑和也 (2018) 大学キャンプ実習が行動力の成長に及ぼす影響に関する考察、鹿児島大学総合教育機構紀要1、pp. 85-92
- (12) 西島大祐 (2009) キャンプ実習に関する意識調査—教員養成大学カリキュラムにおける授業実践を通して—、鎌倉女子大学紀要16、pp. 79-86
- (13) 文部科学省初等中等教育局 (2002) 体験活動事例集—豊かな体験活動の推進のために—、まえがき
- (14) 労働政策研究研修機構調査解析部 (2007) 若年者の離職理由と職場定着に関する調査離職理由トップは「ストレス」、人を育てる環境にない6割定着策：従業員は賃金向上、企業は教育を重視 (特集 若年層の就労問題：正社員の定着、ニート・フリーターの就職支援)、Business labor trend、pp. 4-15

(受理日 2020年12月12日)